

Section 1

人が利用するには非合理的な物体（紙屑）に依存して合理性を付加していくという空間試行をした。

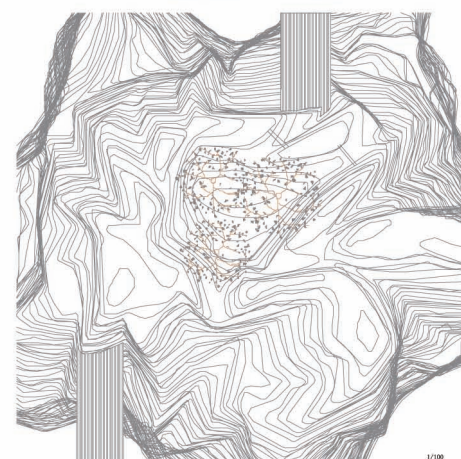
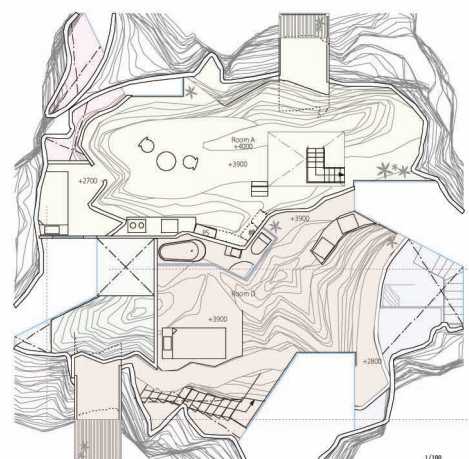
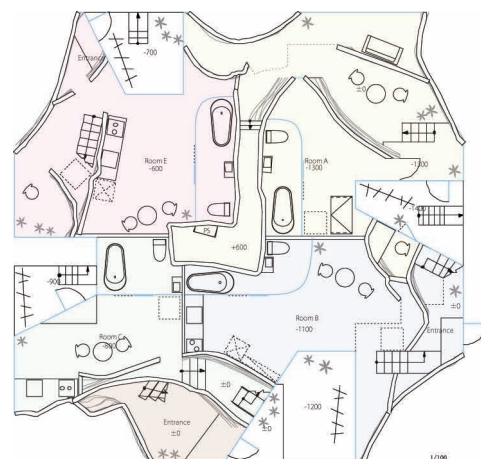
本修士設計では偶然性を紙屑の形態を用いて建築に組み込んだ。建築にしていく過程で、紙屑らしい薄さなどは合理的要素の付加と共に失われていったが、合理性と非合理性のバランスをとっていく上でそれは必要不可欠なことであり、偶然性が失われた訳ではない。紙屑の形態から始った Section1 では紙屑のシワや隙間を継承しつつ、人が利用できるように空間を形成することができたと考える。

非合理的物体

付加

合理的要素

非合理的物体
+
合理的要素



Section2

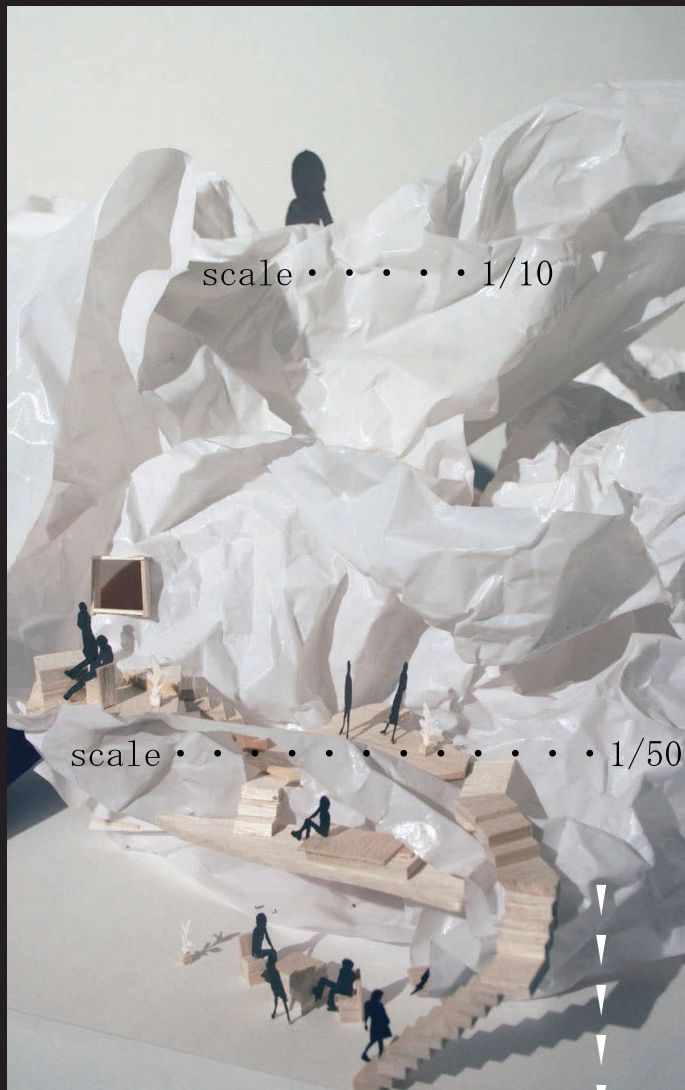
模型としての紙屑、切り取られたスケール

紙屑を「紙屑」として捉えたときそれは紙屑でしかないが、「模型」として捉えたとき、そこには無数のスケールが出現する。Section2では紙屑の建築的スケールを取り出す手段として紙屑を「模型」と捉える。実際の紙屑を用い、910×910×350の紙屑模型の中で、人や家具等の縮尺を「1/200」「1/100」「1/50」「1/30」「1/20」「1/10」と、変化させて混在させることで紙屑に於ける様々なスケールの空間を知覚し、写真という手段でスケールを切り取る。

ELEVATION



ALL SCALE



CUT

EACH SCALE



Section3

均質な内部空間を有する一般的なアパートの一室。そこに紙屑を配置していき、1／1の実空間として紙屑の空間を体験する。





Section 1

本修士設計では偶然性を紙屑の形態を用いて建築に組み込んだ。建築にしていく過程で、紙屑らしい薄さなどは合理的要素の付加と共に失われていったが、合理性和非合理性のバランスをとっていく上でそれは必要不可欠なことであり、偶然性が失われた訳ではない。紙屑の形態から始った Section1 では紙屑のシワや隙間を継承しつつ、人が利用できるように空間を形成することができたと考える。



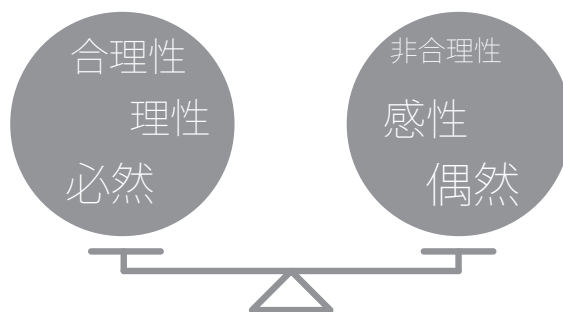
Section 2

模型の中で考察することで様々なスケール感を知覚することができる。近いスケール間ではあまり変化が分からないが、1/200 と 1/50、1/50 と 1/10 などと比べると紙屑の凹凸の使い方が大きく異なる。紙屑そのものが大きな空間を形成することも有れば、クッション性のある素材を仕上げることで家具のように用いることもできる。Section2 のように使われ方が多様に存在したとしたら、利用者側が頭を使う割合が増えてくる。単なる家具のレイアウトを変えることのできる自由とは大きく異なる「空間のレイアウト」を行える可能性が生まれる。



Section 3

Section3 では、元々フラットな面や壁が存在する 8 畳分の空間を利用して構成していった。偶然的物体から始めるものとは異なりその空間構成は意図的なものである。然し、それでも紙屑のシワや、シワによる光の濃淡は偶然性を有しており、洞窟とも異なる淡い表情で囲まれた空間となった。これは、空間的装飾の付加と云えるかもしれない。



合理性和非合理性、理性と感性、必然と偶然のバランスによって現代にふさわしい建築の可能性が見出される

人が建築をつくり、建築が人をつくる

人が建築に使われるのではなく、人が建築を使いこなす

現代では家具のレイアウトの自由は存在しても、空間のレイアウトをする自由はチャンスすら人に与えられてはいない